



## 臍ヘルニア

生まれてすぐの乳児の腸が筋肉の隙間から飛び出し、おへそが膨隆した状態を臍（さい）ヘルニアと言います。

このヘルニアは、5～10人に1人の割合で見られ、多くは生後1ヶ月程度から臍(へそ)のふくらみを認め、生後3ヶ月ごろまでに大きくなり、多くの場合、お腹の筋肉が発達してくる生後6ヶ月までに自然治癒するのが40-60%、1歳頃までに自然に治る可能性が約80%、2歳までに自然治癒（欠損していた臍周囲の腹壁の筋肉が、乳児期の筋肉の成長に伴って自然閉鎖）する可能性が約90%とされています。

しかし、医学的には問題ないのですが、臍ヘルニアだった乳児のほとんどは、おへその周囲の皮膚が「風船がしぼんだあと」のように皺になることが多く、美容的に問題となることがあります。

1か月健診以降にの頃、あるいは3-4か月健診で臍ヘルニアを指摘された方は、早めにご相談ください。

おなかの壁は大まかに3つの層(腹膜・腹壁筋・皮膚)で構成されています。臍ヘルニアのお子さんは、この中の腹壁の筋肉(臍周囲)の膜が完全に閉じずに生まれてきたため、啼泣などで腹部に力が入る際に、腹部の臓器(腸やお腹の水)がヘルニアの袋にとび出ることによって、臍の部分の皮膚がふくれれます。

## 『綿球圧迫療法』

極力、ヘルニア治癒後の皮膚のしわ、たるみが残らないように綿球やスポンジで押さえテープで固定します。

「綿球圧迫療法を**生後3ヶ月以内**に開始すると治癒率が**90%以上**になる」と言われております。

1～3ヶ月間の治療期間で、1～2週毎に受診していただく圧迫交換を行います。

自宅で、もし保護者の方が何か異常（皮膚が赤くかぶれ、絆創膏にシミ、臭い、不機嫌・嘔吐など）を認めたら直ちに圧迫解除、中止してください。その際は、被覆材のテープをゆっくり外側から剥がしていただき、泡石鹸で洗い清潔にしたうえで、受診なさってください。

皮膚の状態が改善したら「綿球圧迫療法」を再開します。

## 治癒しなかった際の、手術時期に関して

ヘルニア門が大きいお子さんについては2歳まで経過観察をしても症状が改善する見込みが低い際は、1歳6ヶ月～2歳の頃を目安に小児外科あるいは形成外科での手術を勧めます。